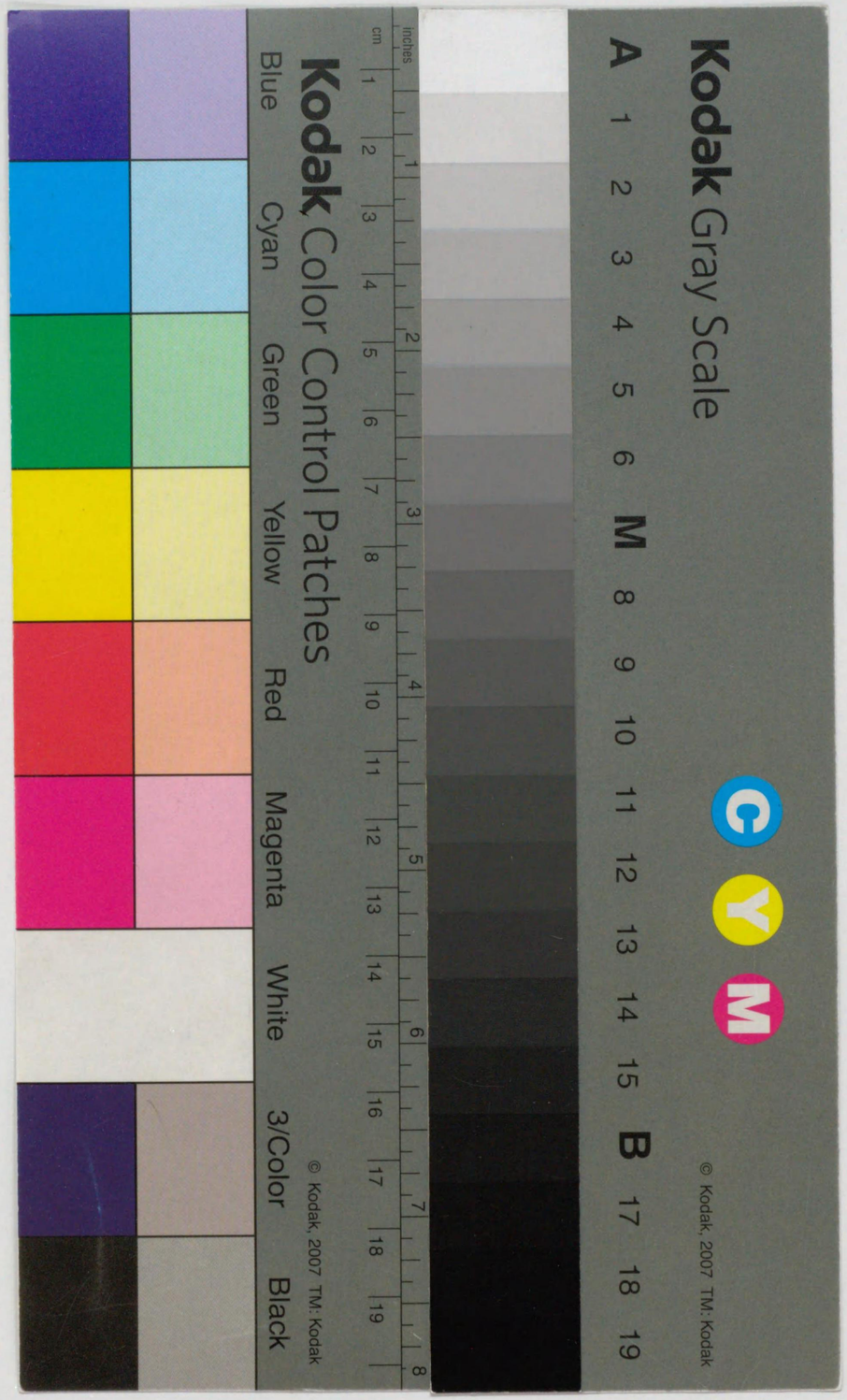
617-281
1200701614431

琅玕



琅
玕

琅

玕

詩

東北

I 種
W

わが心樂し

みはるかす國ばらに光さして
山山はかぎろひにゆらぐ
日はれて空たかし
しづけき雲の舞
五月風やはらかに
野は華香にみつ
たつ波も齊韶をやかなづらん

ああ天や地やわが心樂し
まことに心たのしみてやむことなし

孔子

孔子道をとく
天下容るることあたはず
魯を去り
齊に斥けられ
宋に逐はれ
衞に逐はる
漂浪十四年

糧をたつ陳蔡の野
聖人心悩まず
ひとりあぐる弦歌の聲
ああその聲のこころよきかな
清響千載にのこる
たれかために鳳兮をうたふ
容れられずして君子をみる

湯　王

夏桀を南巢に放ち　都を亳にさだむ
成湯王となり　天下德に歸す
苟日新　日日新
髮洗ふごとに　湯王これを誦す
日日新　又日新
星霜うつれども　この人老いをしらず
我も老いざらん　日日新

銘せんとすれども　盤なきをいかにせん

わが庵に花はなけれど

わが庵に　花はなけれど　さみしくもなし
おとなりの菜の花　いまさかりなり

おとなりの　菜の花は種と　なりにけり
咲きのこる　白豌豆の　すずしさよ

四十雀

白い頰をしてたづねてきたは
どこのこがらか四十雀か
ちいくる　びいくる　ちいくる　びい
松にうもれたこのわが宿に
ぬしと住もやれ千代までに
ちいくる　びいくる　ちいくる　びい
まつの葉のよにこんこまやかに

ふたりすもやれ千代までに
ちいくる　びいくる　ちいくる　びい

ほほじろの聲

ほほじろの聲きけば
山里ぞなつかしき
遠き昔になりぬ
ひとり湖のほとりにさすらひて
この鳥の歌をききしとき
ああひとりなりき
ひとりなり

ひとりにてあらまし
とこしへにひとりなるこそよけれ
風ふきて松の花けぶるわが庵に
頬白の歌をききつつ
いざやわれはまどろまん
ひとりにて

鳴子百合をうゑて

わがこころ早瀬のごとくかたときも靜ならざりしその日よ
人はしらじなおほき淺間の裾にして
山の鳴る音をききつつ
はてもなきから松の林の奥に
ひとりわがおもひしその思ひ
をりしもわがまへには吹きおろす風にゆらぎつつ
青白き鳴子百合の花ささみちたりき

されば こそ色も香もなき野の草なれど
いまもなほわれはなつかしみ思ふこの花を

鳴子百合

鳴子百合
名にこそおへれしら玉の
花をつらねて葉ずゑの露の
ほろとちるにもほろほろゆれる

その花の
香にしたひよる蜂の子追ふと

しろたへの綱うちかけて
ささがにのひく鳴子の唄は
小女郎かはいやほうやれほ
ほやれ鳴れやれなるこ百合

つぐみ

夏がすむ　遠松原に
きよろ鳴く　赤はらつぐみ
古き日の　友にはあれど
そをきけば　われは寂しえ
きよろきよろ　きしめく聲に
まがつひの　うけびぞこもる
我を曳く　羯磨の車

虚空をや　めぐりゆくらん

瑠璃鳥

かゆきかくゆき松原の
小松がくれに姿はみせで
思はせぶりなかた歌に
おもひをさそふ瑠璃の聲
むかし信濃のかた山里で
ついしたそなたと馴れそめて
逢うて別れて十五年

ここの濱べのわび住居
慕うてきたはうれしいが
ひとのそら似もあるものを
聲が似たととめらりよか
歌がにたととめらりよか
笠がようにた菅笠を
ぬいでおみしやれいとしい顏を
もとのいろなら契ろもの
さうでないならまた惚れよもの

じやがたらぶみ

ここはいづこ　　じやがたら島の
卯月ついたち　　しののめに
髪ほのあかく　　肌白き
阿蘭陀だねの　　乙女子が
わするるまなき　　母の國へ
あすは出舟と　　きくほどに
ともし火すごすごと　　かかげつつ

涙につづる　　筆のあと

三とせまへわがふる里をはなたれて
身をうき草の流れよる
こと國にかはらぬものとては
月日の光ばかりぞと
ひるは日のいづるかたを眺め
よるは月のいづるかたをながめて
袖のかわくまも御座なく候
ただひとたび神や佛のおんあはれみにて
日本へ歸り申すべしとこそ思ひ候へ

たとひ三日をすぐしはべらで消えはてまゐらせ候とも
いささかくるしからず
とかく末は日本の土となり候はんとぞんじまゐらせ候
あはれあはれいまいちど御けんにいり申したく
くれぐれ念願にて御座候
もしまたこの世にて逢ひ申さず候はば
わが身かねがね申したるごとく
友だちは七世の契と承り候へば
かならずかならず來世にめぐりあひ申すべく候
げにげに御かたみの短尺をし鳥の羽など
かたときも身をはなし申さず持ちまゐらせ候

これをしるしにてめぐりあひ申すべく候
あまり日本の戀しくてやるかたなき折ふしは
あたりの海原をながめ候よりほかは御座なく候
せめてもの思ひ出ぐさに
松かさ　この手がしはのたね
杉の種　はうき草の種
御いんしんたのみまゐらせ候

あら日本こひしや　なつかしやと
波路はるけき　夷の島にして
あはれや　十七乙女が

思ひかね　　戀ひかぬる
しどろもどろの　　じやがたらぶみ

ふふどり

そのころや　　夢をさませる
わが夢や　　聲にのこれる
をちこちの　　そこともしらず
うつつなき　　鳥のこゑかも
さみだれの　　松の林を
鳴きよふま　　ふふどりあはれ
みさむらひ　　みかさとまうせ

このしたの　露もしげきを
世にわびて　させる柴の戸
風ならで　たたくものなし
いざさらば　いましとわれと
あまごもり　古しのばむ

むかしの戀

ひえびえと
ふりみふらずみ五月雨の
いとしめやかな朝ごころ
やるせないよなこんな日に
好いたどうしのさしむかひ
あれやこれやでついならなんだ
昔の戀をかたろなら

いまも自慢のあの黒髪の
とけて嬉しい謎もあろ
などと思へばむかふの路を
とほる蛇の目がきにかかる

さみだれ（花柳の踊）

國貞が
戀の浮世の一枚繪
すいと立つたるたをやめの
いきな姿のいきうつし
なに思うてやうつむいて
つぼめてもつた傘に惚れ
さんさふりくる五月雨に

ひろげてさした傘にほれ
うたて輪廻かくるくると
まはしてみせた傘にほれ
惚れた思ひの濃紫
ふみにかきつのひともとを
にくやひとめの繁ければ
ひきぞわづらひ申候

燕かはいやみぎひだり
ゆきてはかへりちらちらと
のぞいてきたか雨傘を

傘なざどうでも
さした臙脂が婀娜にじむ
花のかんばせ　やれそれ　みてこいな

鷺

松の林に　鷺の聲す
いざいでてみばや　松の林に
こころよきかな
冷に響なき　石磬の音にさもにたり
わが思にもにたり
いざあととめてゆかな　松の林を

戀のすさび

別れきて
ひなにしをれば
ゆきずりの
人ばかりかは
田のもにたつ
白鷺さへも
白鷺さへも

きみかとぞ思ふ
戀のすさびに

米つき蟲

こんなかはいい米つきよ
おまいは蟲のかくべ獅子
うんときばつてのけぞつて
とんぼきりますぱちくりこ

越後の國をたちいでて
けふたどりつくこの宿に

とんぼきるきる米をつく
わたしやまじめで唄にする

ひとり鷗

荒磯の　ひとり鷗は　さはな鳴きそね
ひとりこそ　われもひとりぞ　夢のうき世に
うき波に　もまれてよする　なのりそわけ
玉藻わけ　いざやひろはん　戀わすれ貝

鷗

たれやらの
胸にあまつた思ひがぬけて
飛んできたよなあの鷗
ほの夕闇にぐつきりと
浮いてうつくし肌の色
なよび姿のなまめきは
戀のことひ名にたかき

都そだちか　よいやさ
つばさならべてならべて翼
なづむ雲ゐのはてまでも
とんでゆきたいわが心

誰にうたはしよわたしの小唄

誰にうたはしよわたしの小唄
あがる雲雀か頰白か
あがるひばりは雲ゐの鳥よ
わしの小唄にやちよいとむかぬ
かはいほじろは野山の鳥よ
わしの小唄にやちよいとむかぬ
浮いた流のあの都鳥

戀の小唄にようによた
によたによたよ姿がによた
こひの小唄にようによた
婀娜なすがたにしんじつ惚れて
ほれてうたはす戀の唄

たなばた

君と比翼の白帆をあげて
心そらなる舟出をすれば
戀の早瀨もうき世の波も
こえてしづけき天の川

としにいちどの逢瀨ぢやものを
天つ星合しらりよとままよ

しんき思案の帆綱をといて
夢に流そや浮名丸

西班牙踊り

あな美し
金
銀
綠
紫
飛びかふ幻
ほのめく陽炎

□□□□□
□□□□□□

おんみは日の沈む西の涯より
日のいづる東のはてまで
風にのりくる色濃き暖國の鳥のごとくわたりきて
いしくもわが魂をとらへたり
イスパニアの舞姫
芳しき南の花
おんみがたなそこに鳴るカスタネットのねは遠きグレキアの昔を偲ばしめ
踏みたつる足拍子はビスカヤの岸をうつ波の音かとうたがはる
誰か妬まざるおんみのたはやがひなにまかるるキタラを

爪赤き指に彈かるる絃を
その聲はピレネーの峯にそよぐ木の葉のごとく
谷を流るるせせらぎにさもにたり
白きくじか
蠱惑
陶醉
わが心かくまどへども
さはれ□□□□□よ
われおんみの藝術に永遠の相をみず
たへなるかんばせに造化の妙をしらず
さびし　極東の詩人は

そこにただ流れ去る「時」のひとつの奇しき波紋
うつりゆく萬象の刹那の耀きをのみみとめて
靜なる涙を浮ぶるばかりなり

六尺の鼎

矗矗たる六尺の鼎
窈窕たる蛾眉の女
織手薪を積んで
沸沸五臓を煑る

矗矗たる六尺の鼎
炎炎たる愛慾の焔

われ智慧の妙香を投じて
轉じて迦留羅の焔となさん

生か死か

研磨金剛心
獨往二十年
道心いまだとげざれども
鬢髮すでになかば白し
生か死か
野に立ち落日をながめつつ
獨きく霹靂の聲

蓑　蟲

町とはいへど秋たてば
つくつく法師なく朝に
露の命をひとすぢの
絲にまかせて蓑蟲が
わしの小庭の椎の木で
誰にみしよとのかるわざぞ

ふりすてられし鬼の子が
ちちよ　ちちよ　とよびながら
風にゆられてゆらゆらと
ゆれる千番いちばんの
つらい世わたり綱わたり
この宙乘りをみさいな

白萩のやど

琴をひき　芹をつむとふ
山城の　日野にあらねど
世のなかの　よしなしごとを
しら萩の　宿はすみよし
雨すぎて　月なき宵の
はまびさし　夜寒ぞはやき
こほろぎよ　すがらに鳴きて

うき人の　　夢をさますな

かはい白萩

かはい白萩いろにはでねど
風がさそへばついなびく
戀のおもには朝つゆ夜露
なやむ姿もいぢらしや
玉とちります思ひの露が
ほんにちるちる風にちる
こひし戀風身にしみじみと

みだれふす身のいぢらしや

小　萩

しんぞみそめたやれこの小萩
風にやあてまい露にさへ
なびきや氣になる濡れればつらい
わたしひとりのこの小萩

沼　べ

雨あがりの　納屋のかげに
ぶらりとさがる　支那瓜
柑子みかん　茶の花
ねぎの畑　あゐの畑
藍の花　くれなゐにさき
かたはらに　黄菊さく
なきのこる　蟲をききつつ

あひるの行水を　みてゐれば
渡し舟に　のりおくれて
おうおうと　岸によぶ人
雨ぐもは　ひくくかかり
沼の波　つめたくよる
ひとりたち　しづかに思ふ
うれしくもわれは　ここに來しかな

むかごとり

雨あがりの　雲うごく
秋びよりの　むかごとり
松にからんだ　蔓をひけば
はらりはらり　ころころ
やぶをわけて　ひろひかかる
小さな　かたつむり
紫蘇の香を　すずしみ

茗荷の子も　みつけたり
やれこら　かたづける
いんげん　茄子のから
熊手で　かきのければ
ぱつとめだつ　赤とんがらし
その茎に　逃げのぼる
かまきり　かねたたき
青き實も　つきたり
白き花も　咲きたり
やあれとんがらし　はあれとんがらし
きやたつに　腰かけて

悦にいる　おやぢ
秋茄子　ささぎ
むかご　むかご
わがやの　とりいれは
小笊に　みちたりや

鶉

しらず　しらず　かりもまことも
われやひと　ありやなしやも
松風ふきあれて　夢もなき曉に
さびしかつかつと　玉をうつ鶉の聲

母の死

不信の信
無道の道
白玉
琅玕

母の死霹靂のごとく
音なき谷のごとし

五十にしてわれ幼な子のごとく呼ばん
母よ　母よ
去りて行くところをしらず
雲のごとく
風のごとし
とどまるものもおなじ
すべて虚空にひとし

ああ　不信の信
無道の道
白玉

また琅玕

うらさびし

雲ひくき　沼のうへを
なきわたる　椋鳥のむれ
西風ふきて　葦かれぬ
うらさびし
雨にさまよふ　畑野の路

小春の沼べ

雨あがり　茶ばたにむるる　赤とんぼ
篠きりて　となりの茂平　とやつくる
帆の影も　ほのぼのかすむ　小春びより
夢にきく　うしろの岡の　頬白の聲

しぐれ

雨雲に　羽根うちかはし
山こゆる　雁のつらつら
松をふく　風のおときけば
たまさゆる　冬きにけりな
夕たちて　おもひぞかへす
ひとの世は　わびしかりけり
松原の　時雨にぬれて

ひえびえと　　蕎麥の畑みる

阿蘭若

をりをり古人のふみを繙き
獨り清淨の心をやしなふ
靜にまたしづかに日ゆき月ゆく
ああ阿蘭若
松籟鳥聲を友とす

われやひと

われやひと
夢かうつつの枕にひびく
しんぞ身にしむあの聲は
しんぞ　しんぞ
戀のねとりか寐ざめの鳥か
さびしひと夜をなきあかす

わたしの胸

わたしの胸の湖に
きてはやすらふ渡り鳥
雪のしら鳥鴛鴦の鳥
戀にゆかりの都鳥
名におふうとうやすかたや
あまつかりがね浮巣の鳰よ
游ぶ姿もとりどりに

うき名たてゆく浮寐鳥
きたというては波がたち
いたというては波がたつ
人こそしらねもろ足の
やすむひまなき思ひかな
三十五年春や秋
あのその鳥もたつていた
めぐる一萬二千日
あのこの鳥もたつていた
いく鳥たつて跡もない
鏡のやうな水の面

たつを忘れた鳥のよに
ついと浮んだ月の影

佛陀

昔かの釋迦族の王子は
ふたつなき道を求むと
家をすて國をいでて
摩伽陀の領、尼連禪河にほどちかき
優婁頻螺の村の林に
六年の苦行を修しぬ
されど傷ましき飢ゑと疲れのすゑ

彼はその益なきをみて
河に水あび
村の乙女が乳糜の供養をうけたり
ああこれこそ放棄
大放棄なれや
されど心なきただ人たちは
彼を退轉者とぞあざみたる
かくて涼しき菩提樹の蔭
草刈のをのこがささげし
やはらかき草の菌のうへにして
一夜忽に大覺をえたり

げに眞如は望の月なれや
一切衆生慈悲の光
あまねく照す人の世に
佛陀よ　われは闡提なれども
佛陀よ　汝はならびなきかな

種蒔きの譬

壞色の衣
土製の鉢
比丘は婆羅門のまへに立ち
目をふせ
默然として食を乞ひぬ
その身は痩せて家なき犬に似たれども
彼の煩惱は斷たれ

靜にして滿月のごとくなり
婆羅門比丘にむかひていふやう
沙門よ
われは鋤きかつ蒔き
もつてわが衣食の料を得
おんみもなんぞ鋤きかつ蒔かざる
比丘答へていはく
婆羅門よ
われもまた鋤きかつ蒔きてわが食を得
婆羅門あやしみとふ
瞿曇よ

われおんみの軛、犂頭をみず
なんぞみづから稼人なりとはいふ
婆羅門よ
われ信仰の種子を蒔き
專念の雨をもつてこれを霑す
謙讓の犂
心意の綱
正法の把手をとりて
精進の牛をつかふ
婆羅門よ
われかくのごとく耕耘し

迷妄の草を刈りて
もつて涅槃の收穫を得
日のした
地のうへ
婆羅門常にこれを問ひ
瞿曇常にこれを答ふ

晩　歸

歸りくる畑野の路　裸木ぞひひと鳴る
日落ちて空黄なり　冬風にさゆる山
ふみたつる鳥黑し　聲もなく草にいる
さびしきわが思ひ　夕づつの影ひとつ

夜にして海べにたてば

夜にして海べに立てば　よる波の音のよきかな
天つちはさながら鼓　闇をゆすり衍にかへす
ちよろづの星くづは　空とぶ鶴むらかも
いしたふや天はせ使　ひたはするわが思ひ
人は生れ人は死す　神もなどか滅びざらん
人は生れ人は死す　道もなどかうつらざらん
いつはりを思ひ棄つれば　人の世は沙漠のごとし

とことはにいにしへいまに　たえせぬは流轉のすがた

霰

をちこちの　あらら松原　霰ふり
梢はみどり　もとはしろたへ
しろたへの　わかやる胸を　かきいだき
くぐひだちして　妹かまつらん
まつ人を　こばたの里に　あらねども
かちよりゆかん　松の木蔭を

夜は深し

夜は深し　月に耀く滿山の雪
思ひは遠し　天に響く海潮音
まことをたづぬれば　乾坤夢のごとし
慈悲をもよほせば　心虚空にみつ

草のとぼそ

あしたに古人のふみを繙き
ゆふべに西山の雪をみる
うらぶれて草のとぼそはとづるとも
冬暖に家人やすけし
またなにをか求めん
人びとよおんみらの小慧をもつて
自足の人を煩すことなかれ

われら千鳥にてあらまし

ああわれら千鳥にてあらまし
美しき貝の花ちるはなれ小島の磯にして
うちよする波の音をききつつ
さびしき口笛をふきてすごさん
または潮くさきしぶきに翼を濡らし
稲妻のごと飛びかけりつつ
呼びかひ戯れてあそばん

わたつみの海のもなかにして
あしたにも
ゆふべにも
はたやよはにだにも
さびしき口笛を吹きならしつつすごさんを
を

わしが思ひ

わしが思ひをたとへよならば
月があがろがお日さま照ろが
明けることないこの世の闇に
ひとり啼くなる寒苦鳥
風に吹かれて飛びたつ夜鳥
雲に迷うたささ離れ鳥
波のまにまに浮寐の鳥よ

わびしうき世のわたり鳥
けふのねぐらもなりゆきしだい
あすの宿りをわしやしらぬ

竹細工

津の國の
なにはの夢の春ならで
ここはあづまの冬ながら
火影まばゆい銀座の夜店
裾もほらほら姿にほれて
買うてもどつた藤娘
なににはぢらふ忍び笠

ひとめせき笠塗笠しやんと
ふりかたげたるひと枝に
かける思ひの濃紫
わたしや綠よ有馬の松よ
藤にまかれて寐とござる

ソフイスト

グレキアの昔がたりに
さかしきみつはのめは
ヘーラの神に罪をえて
言とひしらぬこだまになりぬと
われは今この國に
いかなる神の咎やうけし
とへどこたふるものもなき

ソフイストの流の末と生れぬ
さらばいざやわれらは住まんラトモスの岩屋に
猪うだくカリドンの森に
かくてわれは言とはん聲とならんまで
おんみはとこしへにわがとひをかへせよかし

耶蘇

昔ガリラヤの小邑ナザレの工匠の子
ヨルダンの流に水あびて貴き幻をみたり
かくて彼はみづからをメシアに思ひなしぬ
まことに幻もしばしばわが世にさきはふ
夢もまたわれらに善きを齎す
されどふる里は彼をいれず
都は彼を捕へたり

終にゴルゴタの刑架のうへにして
天によばはるその聲
わが神わが神なんぞわれを棄てたまふや
げに汝の聲は悲し
縊らるる鳥のごとし
イエスよ　汝は人なるかな
われ汝を憐む
われ汝を愛す

埴輪

いにしへの　はしがつくりし
とこわかの　埴輪乙女よ
とほどほし　なが古里は
まきむくの　珠城の宮か
ふるき世の　都のてぶり
もろ肱の　釧もゆかし
わらはめき　はつかにあける

この口や　　こともかよはね
生贄の　　嘆きにかはる
民草の　　ゑみこそうかべ
いみじき　　學匠の
やくなき　　かうぜちより
いくまきの　　道のふみより
たふときは　　なにこそありけれ
はかなき　　埴輪ににたる
ぬばたまの　　夢の世に
とこしへに　　たえせぬは
この「道」と　　人はいふらめ

まきむくの　　珠城の宮ゆ
今にして　　かはらぬものは
かりそめに　　思ふも悲し
こころなき　　流轉のすがた

無間地獄

茫茫阿鼻の道
よろぼひゆく白髪の鬼
かへりみる娑婆世界
萬里毗嵐の風

たづぬれど神も佛もなかりけり
墮ちゆく闇のそこひしらずも

春の雪

枝もとををにふるとはすれど
どこかやさしゆてなまめかしうて
なにを松風うき世も戀も
すてたつもりの柴の戸あけて
誰ぞきさうな春の雪

琴ひきどり

雪の笠きてくる春を
いつしりそめて琴姫が
こんな小さな籠のなか
ひとりぼつちでいぢらしう
わたるとまり木とつおいつ
しんぞ誰をかしのぶ戀
忍びてなくかちりころと

しのぶのみだれ忍び音に

しづかなれや

そよふく　風をたのしみ
もも草の　芽をめづれば
空には　雲雀なき
地には　木木の影しむ
しづかなれや
ひわれし　殼をはなれて
むなしき　わが庭に

くるくると　松の實おつ

野は春ぞ

山やまの　雪はれて
いざよふ　雲の影
春の日　うららに
麥青く　ひばり鳴く
雨すぎて　さやけきひるの
氣もよし　風もよし
あそべ子ら　鳥の子ら

野は春ぞ　野は春ぞ

名もなき思ひ

春の雨　しめやかに
夕けぶる　小松ばら
やきたての　松露のかをり
獨り酌む　五勺の酒
あすはも　落葉やかかん
松かさをや拾はまし
おもひいる　名もなき思ひ

あとなつかし　雲にきゆる鳥

春雨

さんさふれどもささ春の雨
さんさ氣も浮く花もうく

ちよいと濡れましよ花傘さして
ぬれて袂のあせぬほど

ほほじろ

ちちん　ちちん　ちりころろ
松原の
千本小松のそのなかで
きほふもろ鈴かたすずに
鳴く頰白の聲きけば
しろたへの
雪のむらぎえむらのこる

山のかなたに夏きにけりな

ちちん　ちちん　ちりころろ
むかし信濃の旅衣
やはら乙女を思ひかね
ひとりさまよふ山里の
湖のほとりの粟畑
その穂にとまつて鳴いてゐた
ちちんころりやこの鳥の
歌にぞしのぶ若き日の
夢もなつかし年はへぬれど

琴姫

ちいちやな「琴」
ちいちやな「琴」
わたしが歸つてきたときに
誰より先に出迎へた
とまり木を横にぴよんぴよんと
赤いほつぺ

赤いほつぺ
さあさ頰ずりをさせとくれ

にげちやいけない
にげちやいけない
とまり木を横にぴよんぴよんと
なんのたまにひとつぐらゐ
こんなにかはいくてならないもの

ちいちやな嘴
ちいちやな嘴

梅の蕾をせせるはし
どんな舌からころころと
そんな調べがまろびでる
清い薫りのする口に
ためしにキスをしてみよう

黒い頭
黒い頭
つやつや圓いその頭
わたしはちよいと撫でてみよ
いい子　いい子　いい子

かはいい子
かはいい子
この懐へ飛んどいで
おまいのために常春の
愛のかぎろひ燃えてゐる

椿

わしがとこから五ちよべえくれば
音に名だかい久兵衛さんの椿
まはり六尺背は二十二尺
枝もさかえりや葉もしげる

しげる葉蔭にさかりの花が
二百三百しん紅に咲いて

おちたその實が目笊に五百
安いときでも一兩二分にやなるとさ

古　磚

岡本の宮の御代より
千とせまりいくももとせを
ひとひらの瓦に生ける
とこ若の天つ乙女よ
圓かなる童女の笑顔
けうらにうち仰ぐは
迦陵頻の聲あげて

讃佛偈をやとなふらん
かろやかにならぶかひなは
霓裳の舞の手かも
ひざまづくもろ膝は
つつましきくぎやうの姿
おとなき樂のねは
わたつみの潮と湧き
薫らぬ春風は
しろたへの衣をかへす
瓦に彫りし天人の
かざしの花も散らなくに

うつつの國に咲く花の
うつろふ世こそ悲しけれ

ソクラテス

アテナイの四月のゆふべ　人むるる町の廣場に
またしてもさまよひでたる　獅子鼻のでこぼこ親仁
ちんちくりんな身にまとふ　垢つける一張羅
あひるめくよちよち歩き　塵まみれの裸足
行きずりの人をとらへて　懲りずまのがらくた話
人の世に善きをすすむる　聖とは知るよしもなし

神風のデロスの島ゆ　いつき船波こえかへる
瀆神者ぞ　誘惑者ぞ
三百九十九年　この罪びとに
國家がさづくる　掟の毒盃
クリトンよ　アスクレピオスに供物な忘れそ
鳥うたひもも花匂ふ　アテナイの五月のゆふべ
人の世の大き聖が　いまはにきくダイモニオンの聲

うつせ貝

いちはやき　なやみの日にも
をさなびし　をりはありけり
相模なる　みうらの濱に
ひろひてし　このうつせ貝
うつせ貝　うつせ貝
とりあげ　耳にあつれば
そのかみの　浪の音きこゆ

うつろなる　ちひさき口よ
いにしへの　潮の香ぞする
はろばろに　思ひかへせば
こしかたは　うつつか夢か
まぼろしの　それとわかねど
いとせめて　昔なつかし
昔なつかし　むかしなつかし
たぢからを　空おしわけて
天つ日を　昔にかへせ

戀の小鼓

君は小鼓しらべの絲よ
しめつゆるめつ音をいだす
それは嬉しいはつねの鼓
あだし男はふり鼓
胸にひびくは諫めの鼓
はかなき戀のやれ鼓
なさけ涙に目もくれ鼓

祈る天鼓や雲のうへ
戀うてかひなき賤の男に
つれなき人が音なしの
綾の鼓のあやもなき
鼓づくしも戀ゆゑぞ
ああちちぽぽたつぽぽ
鼓なあつづみのしめ緒がきれての
戀の小鼓ねがたたぬ

歌

あやはとりくれはが織りしきぬよりも
いみじうつくし卯月の畑は

いざさらばもろこし人も高麗びとも
花見にござれおらが菜畑

紫のむらむら春の山みれば
胸どよみして人の戀しき

わぎもこが豐のたる乳かふたならぶ
ふたこの山をみればなつかし

春の夜の夢野の鹿のゆめにのみ
きよりなびかひなくはたが子ぞ

妹にこひ大和の野べをわがゆけば
あをがき山も面影にみゆ

春なれど赤はらつぐみきて鳴けば
葛飾野べはいとどさびしき

赤城やま楢の林のおくにして
豆まき鳥をきけば悲しも

かつしかのあびこの岡のぽつぽどり
ぽつぽと鳴けばわれはさびしも

あしびきの山もただよはすさみだれの
相模の國をわれはめづるかも

あを紫蘇の花に蜜蜂つどひきて
つぶらむらさきほろほろ散るも

いとど鳴く草ふか野らのすてかぼちや
黄ばみ蟲ばみ秋たちにけり

わが戀は呼子鳥かもをちこちの
たづきもしらず名をのみぞよぶ

かつしかの沼べに秋の風ふけば
もろこしの穂もさびしきものを

もずなきて小田の鳴子にあかあかと
秋のいり日のさす沼べかな

もろこしの畑をかなしみわが立てば
夕月さして鴨むれわたる

荒れはてし沼田の秋の夕ぐれに
さびしきものかはらはら雀

秋鳥の叫ぶやいづこあれ畑に
茄子のから吹く山おろしの風

豆をうち稻を刈りほし栗をとり
手賀の沼べは秋ふけにけり

秋ふかみ草とびうつる蟷螂の
うら羽の光つめたきゆふべ

松原やまつの香は魂をなごむかも
ひよ鳥なくあらら松ばら

あさ日さす唐棠の畑のしやうごんに
二十五菩薩あもりきまさね

木枯にしらべあはさん笛にせん
その葦くれよあし刈る翁

日くるれば沼べの小田のはさ竹に
ふゆこ冬こと笛ふく木枯

日くれて海かなし沖にかづくむら鳥を
友とはもへどへにはよらぬかも

雪もよひ師走の沼べうちかへす
青ねぎ畑の葱のかをりか

かつしかや手賀のおほぬに雪ふりて
鳰のなくきけば君ぞ戀しき

野は枯れて人影もなししみしみと
沼の氷に冬さめのふる

昭和十年三月五日印刷
昭和十年三月十日第一刷發行

琅玕

定價貳圓五拾錢

版權所有

著者　中勘助

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行兼印刷者　岩波茂雄

精興社印刷

發行所　東京市神田區一ツ橋二ノ三　岩波書店
電話九段〇一八七番
振替東京二六二四〇番

（松木製本）

中村書店
渋谷宮坂上

wht